

## 牧草地、野草地、林地の組合せによる放牧期間の延長とササの永年利用

(畜試 外山分場)

### 1. 背景とねらい

牛肉の輸入自由化攻勢による価格の低迷は、乳オス、日本短角種だけでなく黒毛和種にまで影響を及ぼし、子牛市場価格は年々下落している。このため、以前にも増して低コストで子牛を生産することが求められている。

そこで、低コスト化の一手法として、牧草地・野草地・林地の組み合わせ利用による放牧期間延長とササの永年利用について検討したので指導上の参考に供する。

### 2. 技術の内容

(1) 供試家畜 黒毛和種成雌牛(子付き)

(2) 組合せ放牧地の設定

	放牧時期	放牧期間	1頭当面積	牧区	施肥
牧草地	春～夏	90日	0.3ha	小牧区	春 N5kg
	秋	60日			夏 N5kg
野草地	夏 (主にサ)	30日	0.8ha	大牧区	
林地		初冬			25日

夏は野草地に放牧することで秋の備蓄草量が確保でき、初冬は林地に放牧することで放牧期間延長が出来る。なお、牧草地はイネ科主体の混播草場で、野草地、林地のササはクマイザサである。

(3) 安定利用のための適正放牧圧

野草地; 40~100CD/ha, 林地; 20~30CD/ha

(4) 家畜の増体量

初冬の林内ササ放牧においても、成牛の体重は維持できる。

子牛のDGは、0.7kg程度は期待できる。

(5) 成果の活用場面

山間地の繁殖農家、一貫経営農家及び公共牧場に有効である。

### 3. 指導上の留意事項

(1) ササは、日当たりが良く生育が旺盛なところでは100CDの利用にも耐え得るが、日陰や林内では40CDでも衰退の傾向がみられるので、植生を見ながら放牧圧を調整すること。

(2) 子牛の晩秋放牧はDGの低下をもたらすので、草生状態を見て離乳、退牧させること。

(3) スプリングフラッシュを抑えるために、施肥方法及び入牧時期などに注意すること。

4. 試験成績概要

表1 放牧方法と放牧期間（1992年、外山分場における事例）

月	5	6	7	8	9	10	11	12
月日	5/28			8/24	9/18		11/25	12/15
牧草地	~~~~~>					~~~~~>		
野草地		~~~~~>			~~~~~>			
林地							~~~~~>	
-----								
成牛	~~~~~>			~~~~~>				
子牛	~~~~~>			~~~~~>		~~~~~> 離乳・退牧		
慣行(牧草地)	~~~~~>			~~~~~>				

表2 4年間の放牧実績

(日、kg/日)

年度	1990	1991	1992	1993
入牧月日	5/31	5/21	5/28	5/31
退牧月日	12/24	12/13	12/15	12/21
放牧期間	207	206	201	206
子牛頭数	4	6	5	5
子牛DG	0.66	0.63	0.73	0.73

表3 ササつみとり調査における乾物収量の推移（40CD区） (kg/10a)

年度	1990	1991	1992	1993
林外	273	244	243	185
林内	118	59	64	54